

令和 8 年 4 月22日 岩手県大槌町で発生した林野火災の消防庁長官による火災原因調査の結果について

消防研究センター

1 はじめに

令和8年4月22日、林野火災が岩手県大槌町小鎚地区及び吉里吉里地区で発生し、焼損面積は合計1,708haに及んだ。消防研究センターでは、消防庁長官の火災原因調査を実施し、出火原因及び延焼拡大の要因について検討を行った。その結果、出火原因の特定には至らなかったものの、火災が大規模化した要因や消防活動の効果についていくつかの知見が得られた。本稿ではその概要を紹介する。

2 出火原因調査の結果

小鎚地区では、住民が町道の法面付近から立ち上る炎を発見して通報した。現地の焼損状況や延焼の痕跡を調査した結果、出火箇所は小鎚川沿いの町道の法面付近と判断された。一方、吉里吉里地区では、目撃情報や消防隊の活動記録から尾根付近が出火箇所と推定されたが、焼損状況から詳細な範囲を特定することはできなかった。

両火災について、関係設備の異常の有無や焼損状況を調査し、出火原因の検討を行った。小鎚地区では電線からの出火の可能性について調査したが、送電の異常の記録はなく、電線の焼損状況も火災熱による二次的な影響と考えられた。吉里吉里地区では尾根上に設置された無線通信基地局について調査したが、設備から出火した痕跡は認められず、異常信号の検知時刻も火災覚知後であった。さらに、たばこ、たき火及び放火の可能性についても検討したが、いずれも出火原因を裏付ける物証は認められなかった。このため、両火災とも、出火原因は不明と結論付けた。

3 延焼拡大の要因

調査の結果、本火災の拡大には気象条件と地形条件が複合的に作用したと考えられた。出火当日の大槌町は、乾燥注意報及び強風注意報が発表されており、大槌消防署では最高気温23.7℃、最小湿度8.6%、最大瞬間風速17.2m/sを観測した。これらの状況からフェーン現象の発生が推定され、林床可燃物の乾燥が進んだと考えられる。

また、小鎚地区では火災初期に飛び火が発生し、その後の風向変化によって小鎚川を越える飛び火も発生した。吉里吉里地区では西寄りの風によって尾根沿いに主に地表火で急速に延焼した後、数日後には東から東南の風へと変化し、延焼方向も変化した。特に尾根部にはマツ林が多く分布しており、強風と乾燥条件が重なったことで燃焼が強まったと見られた。

大槌町はリアス海岸特有の急峻な地形を有している。尾根部では延焼速度が速く、燃焼した枝や松ぼっくりが急斜面を転落して斜面下方へ延焼する現象も確認された。こうした地形は火災の拡大を助長するとともに、消防隊の進入やホース延長を困難にし、効果的な消防活動を妨げる要因となった。結果として、乾燥、強風、風向変化及び急峻な地形が重なり、両火災は大規模な林野火災へと発展したものと考えられる。

4 消防活動による延焼阻止

本火災では、釜石大槌地区行政事務組合消防本部、消防団、県内応援隊、岩手県防災航空隊及び緊急消防援助隊により大規模な消防活動が展開された。消火栓に加え、海水、散水車、ミキサー車、遠距離大量送水システムなど多様な水利が活用され、住宅地や中学校等の施設周辺で防ぎょ活動が実施された。

調査では、住宅地周辺の複数箇所で未燃焼の林床可燃物を残したまま火災が停止している状況が確認された(写真1、2)。これらの焼け止まりは消防活動による消炎効果を示唆するものであり、早期の部隊展開と継続的な防ぎょ活動が住宅地への延焼阻止に大きく寄与したと考えられる。

5 おわりに

今回の調査では出火原因の特定には至らなかったが、フェーン現象による乾燥と強風、風向の変化及び急峻な地形が火災の大規模化の要因となったことが明らかとなった。一方で、広域応援を含む消防活動によって住宅地への大規模な延焼は阻止された。本調査で得られた知見は、今後の大規模林野火災対策を検討する上で有用なものと考えられる。



写真1 惣川地区における林野内の焼け止まり状況

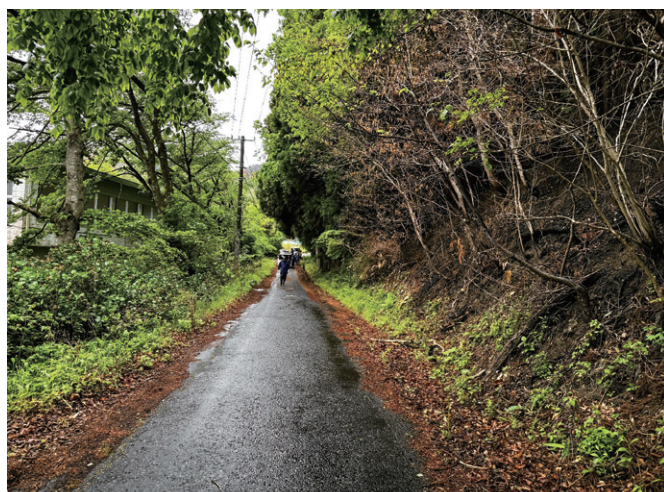


写真2 吉里吉里学園中学部の西側道路における焼け止まり状況

問合せ先

消防庁 消防研究センター
TEL: 0422-44-8331 (代表)